

第3章－3 Bブロックの研究のまとめ

Bブロック

大阪市立桜宮小学校（公立）・大阪市立桜宮幼稚園（公立）

社会福祉法人晋栄福祉会認定こども園 東野田ちどり保育園（私立）

【ブロックテーマ】

「安心して共に育ち、学ぶために～ゆっくり大きくなあれ～」

【指導助言】 大阪教育大学 小崎 恭弘 教授

1 研究の方法

(1) ブロックの現状と課題

それぞれの組織が単体として保育・教育活動を行っており、年に数回の交流はあるものの、相互理解や共通理解・認識が少ないことが実情だった。特に教職員間での交流や合同研修会などを実施したことがなく、保育園と小学校、幼稚園と小学校、保育園と幼稚園など、それぞれがどのような活動をしているのかは知らず、小学校就学によって一斉スタートするのにどのレベルから始めるのか、逆にどこまでできる力が育っているのかなどを見極めることはしていなかった。行っていたこととしては、3月末に新1年生担当教諭が、入学してくる支援を要する子どもへのアプローチや対応についての情報交換を行うために幼稚園及び保育園へ行くことが主な取組だった。

そのため、課題は以下のとおりである。

- ・行事予定や学校園の様子など情報交換を密に行う。
- ・小学校全学年の児童が幼稚園児、保育園児と交流を行う。
- ・幼稚園と保育園との交流を行う。
- ・保護者に保幼小がどのようにつながっているかを知ってもらう。

(2) テーマの設定理由

就学時健康診断時の教育相談では、就学前と就学後の環境の変化に対して子どもも保護者も不安感を抱いているということをよく感じる。桜宮小学校では1年生から6年生が交流するたて割り班活動を活発に行っている。そのため、実際はすぐに低学年の児童たちも環境に慣れ、楽しく学校生活を送ることができている。しかし、就学する前にはその取組や児童たちの様子を知ることは難しい。そこで、これらの小学校の取組を知る機会を設けることや幼稚園や保育園での保育内容や園児の様子を小学校教職員が知ること、子ども同士の交流を密に行うことで園児と児童、園児と小学校教職員が顔見知りになり、不安を少しでも和らげ、安心してスムーズに小学校生活へ移行できるようにしたいと考えた。また、保育と教育、保育者と指導者がつながっているということを保護者に知ってもらい、保護者だけでなく、保育者や指導者、みんなで子どもたち一人ひとりを育てていきたいという思いから今回のテーマを設定した。

(3) 取組内容

下記の取組計画をもとに実施。

小学校全学年と保育園児、幼稚園児の交流、保育園と幼稚園の園児同士の交流を行って
いくように計画した。

(4) 取組計画

R6年度 取組内容		R7年度 取組内容	
4月		4月	・保幼小連携会議
5月	・事業説明・顔合わせ・ブロック会 ・保育園、幼稚園訪問（2年生の生活科の学習）	5月	・保育園、幼稚園訪問（2年生の生活科の学習）
6月	・桜小カーニバル（小学校）へ参加 ・保幼小連携 幼稚園の園庭で遊ぶ	6月	・桜小カーニバル（小学校）へ参加 ・保幼小連携 どんぐり遊び
7月	・プール水泳交流（4年生と幼稚園） ・プール水泳交流（5年生と保育園） ・保幼小連携会議（合同研修会）	7月	・プール水泳交流（小学校と保育園） ・プール水泳交流（小学校と幼稚園）
8月	・保幼小連携会議 （小崎教授による講話）	8月	・保幼小連携会議
9月		9月	・合同避難訓練（6年生と幼稚園）
10月	・保幼小連携 東野田公園でリレー遊び（中止） ・合同避難訓練（6年生と幼稚園） ・保育園運動会（小学校で開催）	10月	・保育園運動会（小学校で開催） ・保幼小連携 リレー遊び ・保幼小連携（2年生）
11月	・小学校学習発表会リハーサル時の見学 ・うたごえひびけの練習（3年生と幼稚園） ・保幼小連携 保育園の園庭で遊ぶ	11月	・小学校作品展の見学会 ・保幼小連携音楽交流（3年生と幼稚園） ・保幼小連携・接続研究報告会
12月	・保幼小連携会議	12月	・保幼小連携会議
1月	・凧あげ交流（5年生と幼稚園）	1月	・凧あげ交流（5年生と幼稚園）
2月	・就学前食育授業 （栄養教諭が保育園、幼稚園に訪問） ・昔の遊び体験（1年生と幼稚園）	2月	・就学前食育授業 （栄養教諭が保育園、幼稚園に訪問） ・昔の遊び体験（1年生と幼稚園）
3月	・新1年生についての引継ぎ会 （小学校教諭が保育園、幼稚園に訪問） ・保幼小連携会議（まとめ）	3月	・新1年生についての引継ぎ会 （小学校教諭が保育園、幼稚園に訪問） ・保幼小連携会議（まとめ）

2 研究の内容

【1年目の取組】

(1) 6月 桜小カーニバルへの保育園、幼稚園の参加

交流を通じて、参加した園児にただ楽しんでもらうだけでなく、小学校のたて割り班活動の様子を知ってもらうことができた。また、小学校で行っていた遊び（お店の出し物）を実際に園児が園でも実施することもあった。

(2) 7月 プール交流

4年生と幼稚園、5年生と保育園が桜宮小学校のプールで交流を行った。小学生2人、園児1人でグループをつくり、水中でフープくぐりや宝物さがしを行ったり、全員でじゃんけん列車などを行ったりした。普段なかなか入ることのできない小学校の大きなプールで、園児たちは児童と一緒に活動することで、安心感をもちながら楽しんで交流することができた。

(3) 7月 合同研修会・意見交換会

小学校の指導者、保育園、幼稚園の保育者が集まり、保幼小連携を進めていくための合同研修会を行った。その際、講義だけではなく、それぞれの保育・教育活動についての紹介も行った。

(4) 6・11月 保育園、幼稚園の交流

幼稚園ではどろんこ遊びをした。保育園では屋上の遊具で遊んだり、卓球をしたりして、保育園と幼稚園の園児同士の交流を行った。遊びを通して、自然と仲良くなり、保育者が間に入らなくても声をかけあって遊ぶ様子が見受けられた。

(5) 10月 合同避難訓練（6年生と幼稚園）

地震・津波が発生したことを想定して、合同避難訓練を行った。地震発生後、幼稚園の園児たちが小学校へ避難した。そして津波警報が発令されたと想定し、6年生とペアを組み、小学校の最上階（第2音楽室）へ避難した。児童が声をかけながらとてもスムーズに避難することができた。その後、幼稚園の保護者が小学校の第2音楽室まで来て、引き渡し訓練を行った。

(6) 2月 幼小昔遊び体験交流

1年生児童が地域の方から教えていただいた昔遊びを、幼稚園の年中の園児に教えながら一緒に遊ぶという形で交流を行った。遊びの種類ごとにブースを作り、そこをペアになった園児・児童がローテーションで巡りながら活動をした。特に学校生活の中では一番年下になる1年生児童にとっては、下の子どものお世話をできることが嬉しかったようで、たくさん声をかけて仲良く過ごす姿が見られた。

(7) 2月 就学前食育授業

小学校の栄養教諭が保育園と幼稚園に訪問し、小学校の給食について紹介した。園児は実際に使っている給食の食缶を持つ体験をしたり、給食についてのクイズをしたりと、楽しみながら給食について知ることができ、入学への期待感を少しでももつことができた。

【1年目の成果と今後の課題】

成果

- 保育園や幼稚園の園児と教職員、児童がつながれたこと。
交流を行うたびにたくさんの園児が手を振りながら声をかけてくれるようになった。また児童たちは交流した時に仲良くなった園児の名前も覚えていて、声をかけたり、いつの間にか一緒に遊んでいたりするシーンが見られた。
このようにお互いに顔見知りとなり、入学してきた時に「来たね」「待ってたよ」などと声をかけてあげられる関係をつくっていったら不安解消につながっていくと考える。
- お互いの保育、教育の様子を知れたこと。
特に小学校の活動の様子を保育園、幼稚園の保育者が知ったことである。
交流により、保護者がイメージだけで「小学校はこうだ」と捉えてしまって不安を抱く原因になっていくことを防ぐことができる。保育者を通じて、実際の小学校を園児だけでなく保育者が知ること、園児の入学へのワクワクする気持ちを伸ばしたり、保護者の方の不安を軽減したりすることができるのではないかと考える。

課題

- 保幼小連携・接続を継続すること。
保幼小の連携・接続を続けるためには、お互いが無理なく交流することが必要だと感じた。
小学校だけで言うと、一つの学年に交流が偏るのではなく、各学年がどの活動の時に保育園や幼稚園と交流できるかを考え、全学年が交流することが無理のない連携につながっていく。新しくビルドすることなく、お互いの今ある行事や、小学校の教科などの活動と結び付けて行うことも継続するためには大切だと考える。
また、交流にとどまらず、就学前施設での学びの芽が小学校の学びへとつながるよう、各々のねらいをもって交流を深め、カリキュラム作成につなげていきたい。

【2年目の取組】

(1) 6月 桜小カーニバルへの保育園、幼稚園の参加

卒園児の小学校1年生との再会を喜ぶ姿があった。小学生の方から園児への声をかけゲームに誘ってくれ盛り上げてくれた。また、幼稚園では経験したことを園内行事で子どもたち自身が主催したことでつながりがもてた。

(2) 6月 保育園、幼稚園の交流

保育園では屋上園庭の遊具・室内の卓球・製作遊び、幼稚園ではどろんこ遊びをして交流をした。顔見知りになっている子どももおり、遊びを広げていくために会話をするが増え、意見を伝え合う姿があった。

(3) 7月 プール交流

4年生と幼稚園児、5年生と保育園児が桜宮小学校のプールに入り交流を行った。小学生と園児でペアになりフープやビート板を使って様々な遊び方を教えてもらい楽しむことができた。小学生は常に園児のことを気にかけ優しく声をかけていた。

(4) 8月 合同研修会・意見交換会

夏休み時期を利用し研修会を行った。3校園の職員が集まり、6月の保育園・幼稚園とのどろんこ遊び交流の様子の映像を見た。遊んでいる中にも様々な学びがあり、その遊びが小学校の教科につながる部分があるなど、職員自身も学ぶことができた。

(5) 9月 引き渡し合同訓練（地震・津波）

幼稚園の3、4、5歳児の2次避難として小学校に避難に行き、6年生が手をつなぎ、小学校の最上階へ一緒に避難をした。1対1で避難しにくい園児に対して、2名の児童で声をかけながら優しく誘導する姿があった。

(6) 10月 リレー交流

保育園と幼稚園それぞれの運動会で取り組んだリレーで交流を行った。保育園・幼稚園混合チームでは、1回戦後に作戦タイムをつくり、走る順番や勝つためにはどうするかをチームで話し合い、意見を出し合う姿があった。

(7) 1月 幼小凧あげ交流

小学校の校庭で5年生と、5歳児が凧あげ交流を行った。5歳児1人に4～5人の5年生が付き添い、凧のあげ方を、目線を合わせて教えたり、励ましたりしたことで、幼稚園の子どもたちが繰り返し凧あげを楽しんでいた。小学生の優しさに触れ、帰り際までハイタッチをしたり、手を振ったりして親しみをもつ姿も見られた。

(8) 2月 就学前食育授業

小学校の栄養教諭が保育園と幼稚園を訪問し、小学校の給食について紹介した。園児は給食についてのクイズに挑戦したり、実際1年生になったら使用する食缶を持つ体験をしたりと小学校の給食について知ることができた。

また、最後には教諭へ質問する時間があり、園児から様々な質問が飛び交い小学校への期待を持つことができた。

3 研究のまとめ

研究報告については、以下の流れで行った。(詳細は P46、P47 の研究報告会当日資料)

1. 連携・接続までの経過
2. 連携・接続の実践報告
3. 園児の変容
4. 成果と課題

研究の成果について

① 互いの認知

小学校・保育園・幼稚園で過ごす子どもたちが、それぞれに互いの存在を知り、感じることができたことが一番大きな成果だと感じている。

特に、保育園や幼稚園の子どもたちにとっては、自分が生活している場所（ここでは園の意味）以外にも、同じ地域の中に同年齢の友達や、少し年上のお兄さん・お姉さんがいて、それぞれが違う生活をしていることを、交流を通して知ることができた。

また、交流を重ねることで「また会いたい」「また行きたい」という気持ちが強くなり、互いの存在をより強く感じるようになった。

② 機会の拡充

子どもたちは、特にハード面において立地条件等それぞれが限られた環境の中で生活をしている。その中で、互いの環境の「良さ」や「特長」を生かして共有する機会が設けられたことも成果であると考える。

例えば今回の取組においては、小学校にしかない大きなプールでの水遊び、グラウンドを広く使ったの風あげなどの遊び、幼稚園でしかできないどろんこ遊び、保育園でしかできない安田式遊具、卓球遊びなどが挙げられる。

普段の生活の中で経験できない場での遊びを通して、新しいことを体験し、挑戦することが子どもたちの「学びの芽」を育み「自信」へとつながっていくことが考えられる。そして、そこからさらに新たな挑戦を見つける子どもたちも出てくることが期待できる。

③ 情操の育成

桜宮小学校においては、普段からたて割り班である「ファミリー活動」で年下の子どもたちと関わる機会が多くある。しかし、特に低学年の子どもたちについては、どうしても上の子どもにお世話をしてもらおうという立場になりがちである。そういう子どもたちにとっては、自分より下の保育園や幼稚園の子どもたちと関わりお世話をするという

立場を経験することは、今後の育ちを考えても、非常に意味のあることだと捉えている。

また、小学生の子どもたちにとっては、年下の子どもたちと関わることで気持ちが穏やかになり、癒されていた部分もある。優しく包むような表情を見せ、それを行動に移す姿に、年下の子どもへの深い思いやりを感じた。

一方、保育園・幼稚園の子どもたちの中にも、小学生との関わりをきっかけとし、年下の子どもたちに目を向け優しく接するような場面が見られるようになった。さらに、上級生からのぬくもりを感じることで年上の友だちへの憧れを抱くようにもなった。

子どもたちのそうした姿から、小学校入学を保育生活の区切りとするのではなく、その先も地域全体でつながりながら子どもたちの未来を支えていくことの大切さを実感することとなった。

④ 相互の理解

お互いの施設へ赴く機会が増え、その特長や取組、子どもと向き合う姿などを職員同士で話し、知ることができたこともとても大きかったと感じている。

保育施設としては、就学させるにあたり 10 の姿を育ちの目標とし、ねらいを定めて日々の保育を進めてきた。その中で、小学校職員の方々の話を聞いたり、現場を見たりすることで、どのように4月が始まるのか、何を大切にしながら過ごしているのかが明確になった。同時に、あわてずにゆっくりと子どもたちそれぞれの育ちを見守りながら安心して小学校に送り出していけばよいということを感じることができた。

小学校としては、園からどのような育ちをしてきた子どもたちが上がってくるのかを知ることで、どこをスタートラインと定めて子どもたちの小学校生活を始めていくかを考えやすくなった。

お互いの実態を知ることにより、自分たちの保育や教育実践のビジョンを具体的なものにできたと考える。

連携以前は就学した子どもがどんな風に小学校で生活しているのか、その姿を見る機会がなく、卒園後の子どもたちに関して正直心配が多かったが、連携をすることにより、小学校での学習の様子を参観する機会があり、そこで就学した子どもたちの姿を見てとても嬉しく感じた。

研究の課題について

① 時間の確保

研究を進めるにあたって、3校園が挙げた一番大きな課題は取組の様々な時間を確保していくことの難しさであった。

子どもたちが交流する日程、職員同士の打ち合わせや振り返り・意見交換、小学校においては定められた授業時数に交流をどう取り込んでいくか、など時間的な縛りが多くあったように感じている。

今後取組を継続していくにあたっては、子どもも大人も含めて、それぞれに関わる人の生活について、時間の流れ・環境・与えられたものが違う中で、それらをどううまく擦り合わせながら進めていくのかを考えていく必要がある。

② 他園所との連携

現在桜宮小学校に入学する約3分の2の子どもたちが、今回研究を一緒に行った桜宮幼稚園、東野田ちどり保育園からの卒園生である。しかし、当然ながら校区内には他の保育園や幼稚園が存在している。また、校区外の園所から入学してくる子どももいる。3校園の交流が活発になればなるほど、他の園所への意識が稀薄になっていく懸念があるのではないかと感じている。

全ての園所と密に連携を取ってというのは現実的ではないと思うが、他の園所との交流の在り方、そこに関わる職員や保護者の疑問や不安にどう応えていくかについては、常に意識をしておく必要がある。

発表の最後に

園同士の交流により、就学前に少し知っている友だちができたことが、就学後の大きな安心感につながる。また、これまでの交流で培った「自園以外の友だちと関わる経験」は、就学後また新たに出会う友だちとの関わりを支える力になっていく。さらに、小学校へ何度も足を運び、様々な交流を重ねる中で、小学生に優しく接してもらうことで得る安心感と共に、その姿への憧れの気持ちをもつことが、就学後の学びの土台になると考えられる。

本研究を通して、今何よりも大切だと感じていることは、この取組を2年間だけのものとせず、子どもたち、職員の関係性も含めて継続させていくことである。

場所や環境は違えど、保育園と幼稚園が同じ地域に生活する幼児の育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と照らし合わせながら共有していき、そこで芽生えた学びの芽を小学校の教科へとつなげていけるよう、手を携えながら取組を進めていきたい。

4 指導講評 講師：大阪教育大学 小崎 恭弘 教授

(記録：Bブロック教職員)

保幼小の接続を考える際、まず押さえておく点として、保育施設と小学校では、“法律の根拠”“成り立ってきた歴史”そして“果たしている機能”が異なるという点が挙げられる。保育は、子どもの経験を土台とし、どのように育っていったほしいかという『育ちの方向性』を大切にしている。一方、小学校教育では、到達の目標が明確に設定されており、例えば1年生では50音、2年生では掛け算九九といった具体的なゴールが示されている。そのため、テストによる査定や評価が可能となっている。

保育と小学校教育の違いを踏まえたうえで重要なのは、保育は小学校の準備教育ではないということである。保育には幼児教育としての特性があり、その特性を生かすことが大切である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、小学校教育へとつながる大きな意味をもち、保育者と小学校教諭が、子どもの姿を共有していくことが極めて重要である。

小学校の姿を見て分かるように、小学校では学習を中心としながらも、人との関わり、掃除、給食など、学校全体の活動文化の中で子どもたちが育っている。その軸は学習に

あるが、この学習と幼児教育をつないでいるのが、「発達」「学び」「生活」「対人関係」という4つの視点による連続性である。幼児教育では、遊びを大きな軸として子どもの育ちを支えており、その遊びの中に、小学校教育における学びにつながる根っこや芽に育っていく。

こうした遊びと学びをつなぐ架け橋として「3つの資質・能力」が重要であると考えられている。これは、幼児教育を出発点として、小学校・中学校・高等学校、さらには大学に至るまで、日本の教育全体を貫く縦軸である。特に保育に関わる立場として意識しておきたいのは、「知識・技能の基礎」「思考力・表現力の基礎」といったように、「基礎」という言葉が付くのは幼児教育のみであるという点である。保育においては、子どもに明確な到達目標を設定し、そこへの到達を求めるのではなく、あくまで基礎を育てていく段階であることを大切にしていける必要がある。

遊びが学びにつながる根底には、子ども自身の探究心や好奇心がある。「面白い」「不思議」「なぜ」「どうして」といった感動が、学びの出発点となる。例えば、水を流して遊ぶ姿は、保育の現場で日常的に見られる。長く遊び続ける中で遊びは変化し、子どもは試行錯誤を重ねながら新たな遊びを生み出していく。砂場での水の流れの経験は、小学校5、6年生の理科における「水の流れ」や「土地の変化」といった学習にもつながる感覚を育てている。

このように、単に遊んでいるだけではなく、その遊びが学びへとつながっているという視点を、保育者が意識することが大切である。ただし、「これをしなさい」「こう遊ばなさい」と大人が指示することが重要なのではない。探究心や好奇心は、子どもが主体となってこそ育つものであり、大人から押し付けられて生まれるものではない。そのため、多様な環境の中で、子どもが自由に遊べる時間と場を保障することが重要である。

国においても、幼児教育と小学校教育の「架け橋」となる取組に力が注がれている。幼小接続がスムーズに行われている地域では、小学校低学年の不登校が比較的少ないという報告もある。低学年の不登校は全国的に増加しており大きな課題となっているが、幼小接続のハードルを下げることで、その抑止につながる可能性があると考えられている。

また、現在の小学校では、1・2年生に理科や社会がなく、「生活科」として学びが構成されている。生活科の内容には、草花、木の実、砂、土、水、光など、保育を思わせるような身近な自然物が多く含まれており、幼児教育との接続がより近いものになっている。小学校の教員にも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた指導が求められている。

子どもが安心して就学につながるためには、「構造化」が重要である。日時、時間、場所、そしていつも同じ大人が、同じ場所で、同じような活動を行うことで、子どもは生活に見通しをもつことができる。小学校がどのような場所で、誰がいて、どのような活動が行われているのかを知ることは、子どもにとって大きな安心につながる。

今回の取組では、公立と民間、保育園と幼稚園が協力し合い、小学校では1年生から6年生までが関わり、活動によっては、3・4歳児が参加している点が特徴である。さ

らに、校長や園長といった管理職が主体的に関わっていることも大きな意味をもっている。1年生から6年生までの関わりは各学年の「0.2の手間ひま×6学年の交流=1.2の経験値」となり、来年の1年生に『1.2の価値を生む』という考え方は、幼小接続に取り組むうえで非常に示唆的であり、未来の子どもたちにつなげていく姿勢として広がっていくことが期待される。

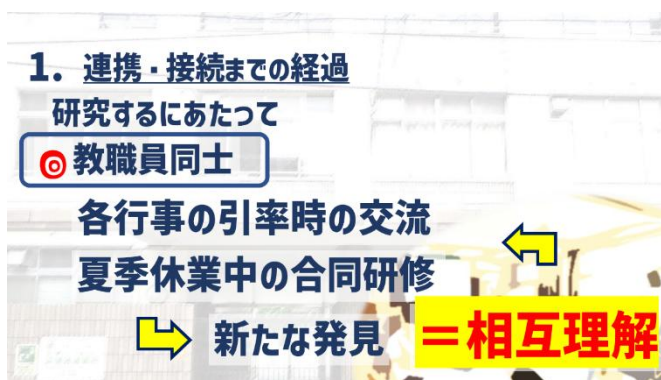
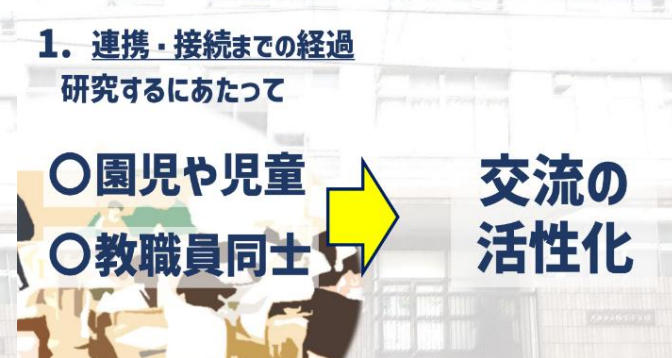
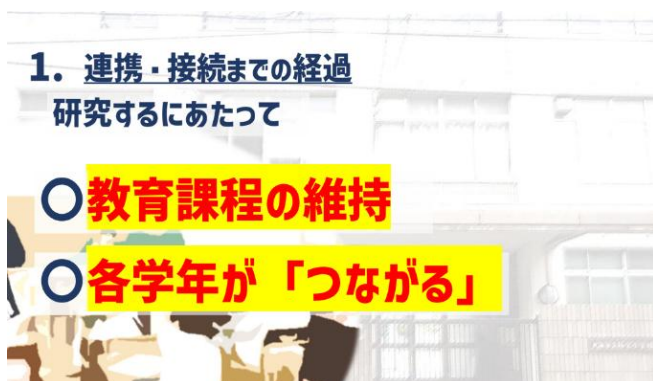
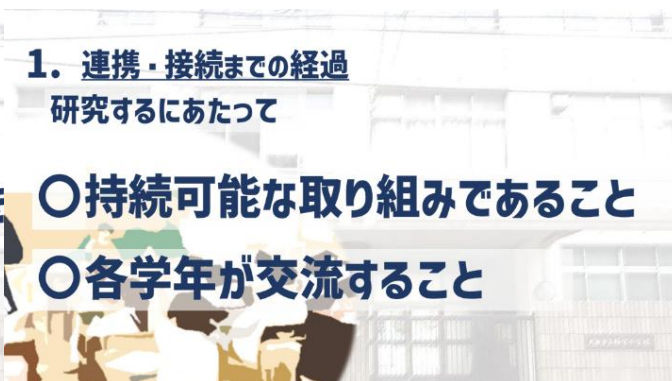
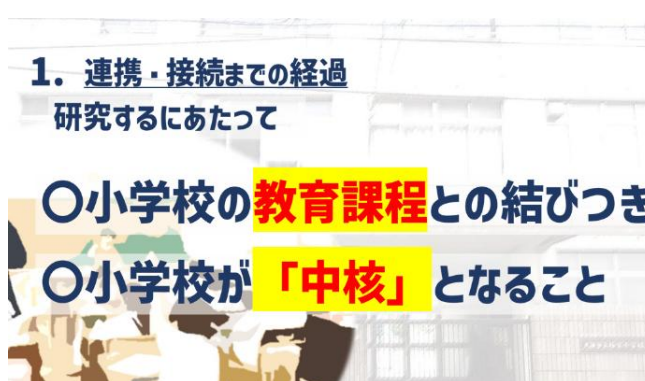
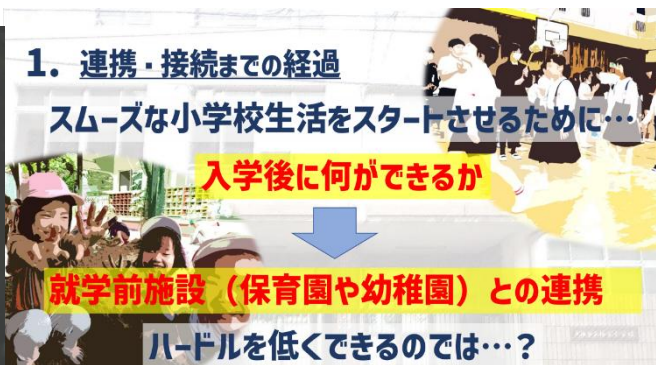
最後に、幼小接続のポイントとして、子どもが安心して生活できること、物事を前向きに楽しむ力、自分で行おうとする主体性、集団の中でのコミュニケーションの力、よく見る・よく聞くといった学習の基本姿勢、話す・書くといった言葉の力、時間を意識して活動する感覚、そしてICTに親しむ経験などが挙げられた。1年生の授業の約3分の1が国語であることから、これらの力は国語学習の基礎となり、子どもたちのより豊かな生活へとつながっていくものである。

5 参加者のアンケートから（一部抜粋）

- 小学校と幼稚園、保育園との連携の重要性を改めて感じた。
- 子どもたちが入学する際のギャップをできる限り減らしスムーズにスイッチするための提案を、自校に落とし込めることがないかを含めて考えていきたい。
- 当日に全校をあげて参観をしていただいたことで、自分が知らなかった小学校の様子を見ることができた。
- それぞれの環境を生かした交流がとても勉強になった。（交流について）小学校では1年生がするものという傾向があるので、全学年で取り組んでいるということがとても参考になった。
- 全学年にわたって、なお回数を多くとられていて驚きました。各園でできれば、小1プロブレムもおさえられるのかもしれない。
- 研究報告、小崎先生の講演ともにとても勉強になりました。また、幼保こから小へつなぐ大切さを学ぶことができた。
- 子ども同士の交流だけでなく、職員同士で子どもたちの姿や、就学後のイメージの共有があることで、スムーズな連携につながれると感じた。
- 小学校へ行った時に大丈夫かなと、卒園させる時に心配や不安を感じることはあったが、このような取組をしていると、それもなくなる気がする。今後、持続可能で、できることを何かしていきたいと感じた。
- 多様な環境に関われることは本当に貴重でそこから子どもたちが成長していくことを学べた。
- 素直な印象として、学校公開や研究内容を知る中で、ここまで小学校と幼稚園・こども園が連携して関わっているところをはじめて見た。今回の2年生、3年生の発表でも全ての子どもたちが輝いて見えたし、この経験は子どもたちの成長の一步につながっているんだと感じた。
- 幼児が全学年の児童と交流があるというのは聞いたことがなかったので、魅力的だと感じた。
- 保幼小の思いが同じでないと進まない連携を素晴らしい形で進められており、自分自身の学びが大きかった。それぞれの校園長のリーダーシップが発揮されているような発表だった。

6 資料

研究報告会当日の資料より(抜粋)



乙·幼·小

賞鑑ハリ発表習学

4年 プール交流

5年 + 風揚げ

6年 避難訓練

こ・幼・小

○互いの園を行き来しての交流

- ・ちどり保育園で遊ぼう
- ・桜宮幼稚園で泥んこ遊び
- ・東野田公園でリレーごっこ

こ・幼・小

○計画を立てる段階から

共通理解

[illegible]

2. 連携・接続の実践報告 こ・幼・小



3. 園児の変容

ちょっと知っている
友達ができた

様々な友達と関わる経験



3. 園児の変容



4. 成果と課題

- ①互いの認知「また会いたいな」
- ②機会の拡充「新たな経験と挑戦」
- ③情操の育成「優しく関わる姿」
- ④相互の理解「保育や教育の実際」

4. 成果と課題

- ①様々な時間の確保
- ・子どもの交流の日程
 - ・職員同士の打ち合わせ
 - ・振り返りの時間

4. 成果と課題

- ## ②他の園所との連携
- ・保護者の声
 - ・子どもたちの不安感
 - ・3校園のつながりとの差

